
アッシュフォード荘日記《CODE GEASS》

仲月リベリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アツシユフオード荘日記《CODE GEASS》

【Nコード】

N4002H

【作者名】

仲月リベリ

【あらすじ】

森の中にとある洋館がありました。名前はアツシユフオード荘。只のアパートではありません。少々事件が多いような気がしますが至って平和です。ひねった性格の多い住人達は、今日は何をしますのでしょうか・・・？

森の中・出会い（前書き）

コードギアスパロです。生徒会の皆様が主な出演者。色んなキャラに酷い事(?)します。基本ギャグでたまにどシリアスになる予定。目線は話によってコロコロ変わります。ちなみに一応主人公ってコトになってるのはオリキャラです。ルルさん好きなんだけど、あの主人公になるとなんか嫌な予感がするんで（笑

森の中・出会い

とある国の、とある町の中にある、とある森に、とある綺麗な洋館がありました。その洋館は俗に言う「アパート」というもので、名前は“アッシュフォード荘”。もう渋いのかダサイのかよく分からない名前をもつそのアパートには少々脳みその可笑しい者が幾人か住んでいました。

ザクツザクツ

大量の落ち葉を踏みしめながら、僕はふうつと溜息をついた。

本当にこんな所にアパートなんかあるのだろうか……

歩いてても歩いてても、みえるのは木と落ち葉で埋め尽くされた細い道だけ。もう少し歩けば視界が開ける、という道が延々と続いている。ざああつと木が揺れる。一瞬の間をおいて風が吹いた。汗で額に付いた前髪がはがれる。僕はぼんやりと空を見上げた。

まだ、歩くのかなあ……

引越しにしては少な過ぎる荷物の入った旅行鞆が、ずっしりと重くなった気がした。

やだなあ、若いのに。気疲れってヤツ？

空を見上げたまま、一人でにやっと笑う。

ホラ、荷物が重いなんて、気のせいだろう？

一人で冗談を考えながら、荷物に視線を落とす。独りで。

にやあお

「・・・あん？」

視界に入ったのは硬い旅行鞆ではなく、その上に乗った黒っぽい猫。黄色い瞳が愛らしい。

・・・癒される

疲労から頭がぼわんとなる。

そうか、鞆の重さはコイツのせいか。

猫はひらりと飛び降り、僕の前におすわりをする。

君は何処の猫さんだい？

そう聞こうとしゃがんだ時だった。

「いたッ、アーサーッッ!!」

がさがさつと木をかき分ける音がする。上から。

どがん!!

顔を上げる間もなく、人が僕の上に降ってきた。つまり僕は、下敷き。

「ようやく見つけたよ。もう逃げたらだめだよ。僕は一晩中木の上を跳び続けたんだから。」

木の上!?!一晩中!?!?

その人は僕に気付かないまま猫に手を伸ばす。にやうつと猫が怒る。わっ、と声が出たかと思うと急に背中から重さが消えた。その

瞬間を見逃さず僕は飛び起き、その人に向かって叫んだ。半ば怒りモードで。

「誰ですか!？」

座りこんで猫を抱えたまま、その人はぼかん、と僕を見た。そしてにこつと笑った。

「アツシユフオード荘の枢木スザクです。」

もしかして、コイツとこれから生活するの？
ていうか、頭から血が垂れてますよ!？

森の中・出会い（後書き）

主人公（？）はオリキャラで、名前は次に出てくるんで。ていうか次がいつになるのやら・・・。

コメよろしくです。

これから応援よろしくお願いします。

玄関・始まり（前書き）

やってしまった第2回

玄関・始まり

「へえ、じゃあ君が新しく入る・・・えっと」
「クレバーです。」

山道 といつてもそこまで険しくない を歩きながら僕は答えた。
腕の中で黒猫 アーサーがよおんと鳴く。隣に歩く枢木スザクが
ごめん、と笑った。

結局スザクが僕の荷物を持って、僕がアーサーを抱える、ということになったのはいうまでもない・・・のかなあ。

「それにしても遠いんですね。」
もう、汗だくだくですよ。

「えー、そうかなあ？僕は10分もかからないけど」
そりゃあなたは人間じゃないですからあ・・・とかいっいたら多分月の
ほうまでびゅーんだから、そうですねえ・・・笑えねー・・・。

なんだかんだでスザクが降ってきた(?) 場所からアッシュフォ
ード荘までそんなに距離はなかった。

「ここがアッシュフォード荘。僕らの“家”だよ。」
「へえ・・・」

それは僕が想像していたものよりはるかに上回っていた。英国風の洋館のような佇まいをしていて、外装は黄味がかつた白。門も立派だ。

僕らはきちんと門を潜って中に入る。(辿り着いた場所が塀でスザクがよじ上ろうとするのを必死になって止めた。)

「ようこそ、アッシュフォード荘へ！そしてスザク君はおかえり！」
玄関に入るといきなりハイテンションな声が出迎えてくれた。

「ただいま、ミレイさん」

「はっ・・・はじめまして！クレバーです。よろしくおねがいしますっ！！」

年上っぽくて綺麗な金髪碧眼のお姉さんに出迎えられた僕は、思わず直立してしまった。その拍子にアーサーがするりと逃げ出した。「あっ！待ってよアーサー！！ 荷物ここにおいておくから、ごめん！」

そう言うが早いか、スザクはアーサーを追って正面にある大きな階段を上っていった。

「まあ、あれはいつもの事だからあまり気にしなくていいのよ」

「そ・・・そうなんですか・・・」

あれいつもやってんの？スザクどんだけ暇なんだよ・・・という僕のささやかな疑問は誰にも聞こえないわけで、自己紹介が始まる。

「私はミレイ・アツシユフオード。名前の通り此処の管理人。・・・まあ、副管理人には自覚がたらなさ過ぎ、っていわれてるんだけどねえ〜」

おほほ、とミレイさんが笑う。つられて僕もハハ、っと笑う。

「よおーし！じゃあ今日は新住人のお迎えパーティを開くわよ〜！」

「そんな、パーティだなんて・・・！」

僕なんかのために。

「いいのよー、私がやりたいだけ。・・・って、絶対に副管理人には言っちゃだめよ。」

自分のためかい、という僕のツッコミも虚しく、ミレイさんは喋り続ける。

「副管理人だけでも挨拶に行ってくれないかしら？他のメンバーには後で会えるからいいけど。」

そう言つと、ミレイさんは準備しなくちゃ、といいながら奥へと消えていった。

玄関にはぼつんと、僕と荷物が残される。台風が過ぎ去った後のようだ。

とりあえず荷物を片付けなくては。

そう思い、荷物を持ち上げようとしたときだった。階段の上の陰にいる、黒い人影とバチツと目が合った。

誰だろう。

もう一度目を凝らして見たときにはもう、いなくなっていた。

きっと、住人の誰かだろう。

早く副管理人さんに挨拶にいかなくちゃ、という思いが勝り、思考をストップさせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4002h/>

アッシュフォード荘日記《CODE GEASS》

2010年10月9日20時24分発行